

徳島大学渭水会々報

第40号

発行/徳島大学渭水会
徳島大学総合科学部内

題字：田中 双鶴 氏



水の調べ／鎌田 邦宏 氏
→関連記事P 2

Topics..... 2

「あすたむらんどアートプロジェクト
水環境と彫刻」について 鎌田 邦宏

学部長再任のご挨拶..... 3

総合科学部長 石川 榮作

総合科学部では今(22)..... 4

社会的自立・職業的自立を目指す「自らの
就業力向上を促す巣立ちプログラム」
前就職委員会委員長/徳島大学就職支援センター
副センター長 平井 松午

新連載 うたのふるさとを訪ねて 第1回 歓喜の歌..... 5

「第九」と私 浅野 司郎..... 8

新連載 生命の誕生と進化に関する研究の 最近の動向 Vol.1.....10

東京工業大学理工学大学院地球惑星科学専攻科教授 丸山 茂徳

特集 ‘こころ’の防災にむけて

一東日本大震災支援活動から.....12

大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 内海 千種

感動が人間を育てる.....17

小学校時代の恩師の手のぬくもり
大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
総合科学部教授・学部長 石川 榮作

スタートライン.....18

私を強くさせるモノ 一社会人になっての
3か月を振り返って一 岸田 菜月

「スタートライン」に立ち見えたもの 的場 一将

社会人になって 半田明日美

現在の私と心残り 黒谷 功

虚心坦懐 野中 俊介

助任の丘に蜂須賀桜を植樹 佐藤 義忠.....26

Let's sports Vol.2.....28

阿波踊りで楽しく健康づくり 一阿波踊り体操一
徳島大学大学開放実践センター教授 田中 俊夫

エッセイ.....32

最近ふと思い出したこと 野田 陽子
徳島大学を卒業して19年 長山 雅晴
大学院修了後9年間の私 佐藤 文彦
草創期の恩師を偲んで 山田 秀雄
46卒 同窓会 嵩原 彰

助成事業.....37

高校・特別支援学校部会総会並びに講演会
部会長 加藤 賢治

徳大ニュース.....45

総科ニュース.....46

編集後記.....49

「あすたむらんど アートプロジェクト 水環境と彫刻」 について

鎌田 邦宏

あすたむらんど大きな水面（水鏡）で彫刻展を行うということを河崎良行先生から聞かされたとき、何か新しい展開ができるような予感がした。彫刻と水平面との関わりは立ち上がることが基本である彫刻にとっては最も重要なものである。コンセプチュアルな作品でも空間構成または、見るということに関しては、立っていることは彫刻の造形要素であると思う。そこで作品展示で水面に作家の作品が置かれた時に水平面と作品との関係に、何か新鮮な感覚を感じた。

今回の展示は「現代のアートは単なる鑑賞を離れて、都市空間や公共施設のために果たせる役割を積極的に試み始めている。このたびの、あすたむらんどアートプロジェクトはこども科学館前の、広大な水鏡に刺激と変化を与え、また、黒川紀章設計の建築とともに、アートのある環境として景観を高めることを意図したものである。特に、子どもたちや若者が科学体験を楽しみながら感性や直感のアートの世界にもふれる機会ともなり、科学と芸術が落ち合う場所となって、更に水や環境についての関心をも深めてもらう好機になればと考えている。」という趣旨で（2011年4月28日～6月21日まで）開催しましたが、作品が存在する環境から、何か今までと違った場面のイメージを感じ取ってもらうことがねらいでもあります。

この作品展に出品した渭水会の会員は出品者13名のうち、河崎良行「内包する形・FULUR」、三木健司「空・雲」、山上れい「Ring・Ring・Ring」、木村大志「一子相伝」、武田亜希子「月の譜」、鎌田邦宏「水の調べ」の5名で、それぞれの特徴を生かした作品を出品していた。水面と建築の調和をとれた環境に置かれた作品は素晴らしい空間構成を醸し出していた。このような展示の機会が持てたことは、これからの作品制作を行っていく上で、今までと違った制作意図や展開が生まれてくるものと思う。

プロフィール

あすたむらんどアートプロジェクト
実行委員会作家側代表
社団法人 二紀会徳島支部長
二紀会会員
徳島県美術家協会理事
(昭和39年中学校課程美術教室卒)





総合科学部長
石川 榮作

学部長再任のご挨拶

渭水会の皆様には日頃からいろいろとご支援をいただきまして、まことにありがとうございます。本年4月に学部長に再任され、二期目を務めさせていただいています。二期目の学部長としての最大の課題は、今後の新しい教員組織の構築と教育研究環境の充実です。

平成21年度に学部・大学院ともに改組されて、新たに「総合科学」「地域科学」の教育研究を推進していくことになりましたが、定年退職等で教員を補充する場合は、社会のニーズと学生の要望に沿った充実した教員組織の構築に努めたいと思います。

教育研究環境の充実につきましては、おかげさまで2年間に及ぶ1号館の耐震改修も終わって、見違えるほど快適になりました。今回の改修の特徴は、教室・ゼミ室の充実とともに、学生の共有スペースをたくさん設けていることです。学部図書室をはじめ、各学科・コースに学生の自習室を設けているほか、自動販売機を備えたラウンジまであります。卒業生の皆様にも機会がありましたら、是非お越しください、ご覧いただきたいと思います。

外面的な教育研究環境は整いましたので、今後はその内容面での充実が課題です。教育と研究の両面において質の充実をめざして、数年前より優秀な学生には「総合科学部優秀賞」を授与するとともに、今年度より国際的なレベルの研究業績をあげた教員には「総合科学優秀賞」を授与しています。また国際化がますます進んでいく中、今年7月には「総合科学部カルチャーラウンジ」を設置し、そこに学生・留学生・教員が集まって、互いにコミュニケーションを図りながら、語学の学習のみならず、異文化体験も行っています。この「カルチャーラウンジ」の特徴は、学生が中心となって各種イベントを企画・運営していき、それに教員が支援するというかたちをとっていることです。それによって学生の主体的な学習意欲が生まれて、学生生活もより豊かで充実したものとなり、卒業後も社会に大いに貢献できる優秀な人材に育ってくれるのではないかと期待しています。

ITC 情報化がさらに進んで、コンピュータやメールによるコミュニケーションが多くなりつつありますが、一方では従来の直接の触れ合いも大切です。個人の教育論ですが、教育は「愛」であり、その「愛」はまさに「触れ合い(愛)」から生まれます。幸い、総合科学部のカリキュラムは少人数によるものが多いので、きめ細かい教育指導をしていきたいと思っています。今年3月の東日本大震災の影響で、学生の就職活動はさらに厳しいものとなっていますが、学生一人一人に目を配って、教育指導とともにキャリアプランの点でも支援をしていくのが私たち教員の使命でもあります。卒業生の皆様におかれましても、今後ともさらにいっそうご支援・ご協力を賜りますよう、切にお願い申し上げて、学部長再任のご挨拶といたします。

社会的自立・職業的自立を目指す 「自らの就業力向上を促す巣立ちプログラム」

前就職委員会委員長／徳島大学就職支援センター副センター長 平井松午



本年（平成23年）4月に文部科学省は大学設置基準を改正し、大学に対して「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」を培う方策を義務づけました。その目的は、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、豊かな人間形成と人生設計に資することにあります（中央教育審議会、平成21年12月15日）。

大学生にキャリア教育が必要なのかと思われるかもしれませんが、大学進学率が50%を超えて多様な学生が入学しているなか、社会人・職業人としての基礎能力や、産業構造等の変化に対応できる柔軟な専門性と創造性の高い人材の育成が大学に要請されていることも確かです。そこに求められるのは、単なる職業教育ではなく、社会人としての基礎力を有し、社会的自立・職業的自立が可能な人材育成です。

文部科学省はこれに先立ち、平成22年度に大学生の就業力育成支援事業を募集し、徳島大学では総合科学部と工学部が共同申請した「自らの就業力向上を促す巣立ちプログラム」が採択（申請441件／採択180件）されたことにより、総合科学部では本年4月より新1年生を対象に同プログラムを開始しました。

「自らの就業力向上を促す巣立ちプログラム」の主な取組は、1）4年一貫のキャリア教育の実践、2）学生の主体的な取組を促すWeb版ポートフォリオの活用にあります。

入学した1年生は、必修科目として「キャリアプラン入門Ⅰ」および「キャリアプラン入門Ⅱ」の授業科目を受けることになります。前者は大学と社会の関わり、後者はキャリアデザイン・適性把握をテーマとする授業で、2年生以上で「キャリアプランⅠ・Ⅱ・Ⅲ」および「短期インターンシップ」という授業科目の中から学生は1単位以上を履修することになります。それらの科目では、職業意識の形成と基本技能の修得、就職活動の意味と方法、学外実習、就活体験の伝承などがテーマとなっていま

す。「巣立ちプログラム」の詳細については下記のサイトをご覧ください。

また、履修登録などで学生が利用している教務システムの中に、新たにWeb版キャリア学習ポートフォリオを立ち上げました。これは、いわゆるキャリアデザインノートのWeb版で、巣立ちプログラム授業科目用の「学習記録」ページや、学生が自らの社会人基礎力やコンピテンシー（職場で求められる行動特性）を判定できる「キャリアデザイン」ページ、将来の就職活動のための「課外活動記録」ページや「進路・就職情報」ページなどを備えています。学生が就職活動に向けて必要な情報を登録・確認し上手に活用してほしいと願っていますが、その利活用は学生の主体性に委ねられています。

平成20年9月のリーマンショック以降、日本経済は大きく後退し大学生の雇用環境は厳しさを増しました。全国大学生の就職率は平成20年3月卒業生の96.9%をピークに、95.7%、91.8%と低下し、今年（平成23年）3月の卒業生は91.1%でした（厚労省発表）。総合科学部卒業生についても、同時期に96.8%、94.5%、91.3%と推移しました。就職対策強化により平成22年度卒業生の就職率は94.6%と持ち直しましたが、世界経済の不安定さや東日本大震災の影響もあって雇用環境は依然厳しく、採用側の厳選採用は変わるわけではありません。それゆえ、在学生には、自分の将来設計や就職情勢を見据えて大学での学習に努めるとともに有意義な学生生活を送ってほしい、「自らの就業力向上を促す巣立ちプログラム」がそうした面で後押しできればと願っています。

徳島大学では就職支援センター等による就職活動支援を強化するとともに、総合科学部でも独自に就職相談室を設けてキャリアコーディネーターを配置するなど、学生の就職支援に努めています。渭水会をはじめ卒業生の皆様には、「自らの就業力向上を促す巣立ちプログラム」についてご理解を賜るとともに、今後とも引き続き、後輩学生たちの就職活動等に対してさらなるご支援をいただきますよう、よろしく願い申し上げます。

◇「自らの就業力向上を促す巣立ちプログラム」の紹介サイト◇

<http://www.tokushima-u.ac.jp/campus/education/shushokuryokuikuseishien.html>

第1回 歓喜の歌



コスモスに彩られた鳴門市ドイツ館。鳴門市の姉妹都市リューネブルグの市庁舎を模したデザインがおしゃれ

ベートーヴェンの「第九」交響曲といえば、いまや日本の年末を飾る風物詩のひとつ。「歓喜の歌」「よろこびの歌」などと呼ばれて日本全国で愛され、演奏されています。

この「第九」が日本で初めて全曲演奏されたのは、1918年（大正7年）6月1日、鳴門市大麻町の板東俘虜収容所内に於いてのことでした。

第一次世界大戦の際、中国の青島で俘虜となった約5千人のうち、ドイツ兵953人が、1917年（大正6年）から約3年間を板東俘虜収容所で過ごしました。

「俘虜は祖国のために戦った勇士である」という松江豊寿所長の方針にもとづき、板東俘虜収容所では他に例の見ない人道的な運営がなされ、捕虜たちはさまざまな文化活動や事業を行いました。図書館や商店を建築し、新聞を発行し、楽団を作って演奏



収容所跡地に立つ慰霊碑は、俘虜生活の中で亡くなった仲間を偲んでドイツ兵自らが建てたもの

会を行い、器械体操やテニスを楽しみ……そのエネルギーギッシュな活動には目を見張るばかり。なかでも音楽活動はさかんで、複数のオーケストラや楽団が組織され、100回以上もの演奏会が開催されたとか。そんななか、「第九」初演も行われました。収容所には女性はいないので、ソロも合唱もすべて男声用に編曲されたものだったそうです。

鳴門市では6月の第1日曜日を「第九の日」と定め、1982年から毎年演奏会を行っています。近年では日本全国から600人もの合唱団員が集う大演奏会となっています。

俘虜たちが鳴門市に残したのは第九ばかりではありません。鉄条網を越え、国や人種の違い、敵国という互いの立場を越えて、俘虜たちと地元の人々は交流を深め、バターやチーズの製法、西洋建築、牧畜の方法をはじめ多くの技術を伝授しました。地元の人々は親しみを込めて彼らを「ドイツさん」と呼びました。戦時中に生まれたこの奇跡の交流は、「Alle Menschen werden Brüder（すべての人々は兄弟となる）…」という第九の精神そのものだといえます。

収容所跡地を整備したドイツ村公園を中心に、鳴門市ドイツ館、ドイツ橋など、板東地区にはゆかりの施設や史跡が多く残っています。コスモス揺れる道を歩いて、「第九」のふるさとを散策してみましょう。



地元の和泉砂岩で造られた「ドイツ橋」

“ドイツさん”がつくった橋

地元の人々に「ドイツさん」と呼ばれるほどに親しまれた俘虜たち。彼らは帰国する際に、板東での日々を記念して町内にいくつもの橋を建設しました。大麻比古神社境内には石組みの「ドイツ橋」と、二連アーチの「めがね橋」が残っており、90年経た今も変わらぬ姿に、彼らのすぐれた建築技術をうかがうことができます。紅葉の頃はとても風情がありますよ。

映画の舞台になったバラック



洋小屋組の洒落た兵舎。
内部も見学できる



バラックを利用した
道の駅第九の里

ベートーヴェンと記念撮影

収容所での暮らしや活動をジオラマで再現し、写真などで紹介する鳴門市ドイツ館。俘虜が使っていた日用品や楽器、印刷物などの貴重な資料もいっぱい、俘虜たちのいきいきとした活動がうかがえます。等身大の人形が第九初演のエピソードを語ってくれる「第九シアター」（10時～16時30分の間、30分おきに演奏）は必見です。桜やコスモス、鳴門市の花ハマボウなど四季折々の花が咲き誇る散策路にはベートーヴェン像があり、記念撮影スポットとして人気を集めています。



「第九」を振ってるんでしょうか？
ダイナミックな指揮のベートーヴェン



「第九」初演の模様を
再現する第九シアター

板東俘虜収容所をめぐる奇跡の交流は、2006年に映画『バルトの楽園』（松平健主演）に描かれ、一躍有名になりました。撮影にあたって板東に収容所の兵舎（ドイツ語で“バラック”）を再現し、そこでロケが行われました。

現在はロケセット11棟と、町内に現存していたバラック1棟を「阿波大正浪漫バルトの庭」として公開しています。酒保、印刷所、製パン所、兵舎などが立ち並び、ドイツ兵が暮らした当時の様子をしのぶことができます。また、ドイツ館に隣接する道の駅第九の里も、昔のバラックを移築利用したもので、国登録有形文化財に指定されています。

ドイツ兵直伝の味
を受け継ぐ鳴門市撫養町の
「ドイツ軒」。ライ麦、木の葉などの
自然素材を使ったドイツパン
は、ビールやワインによく合
います。

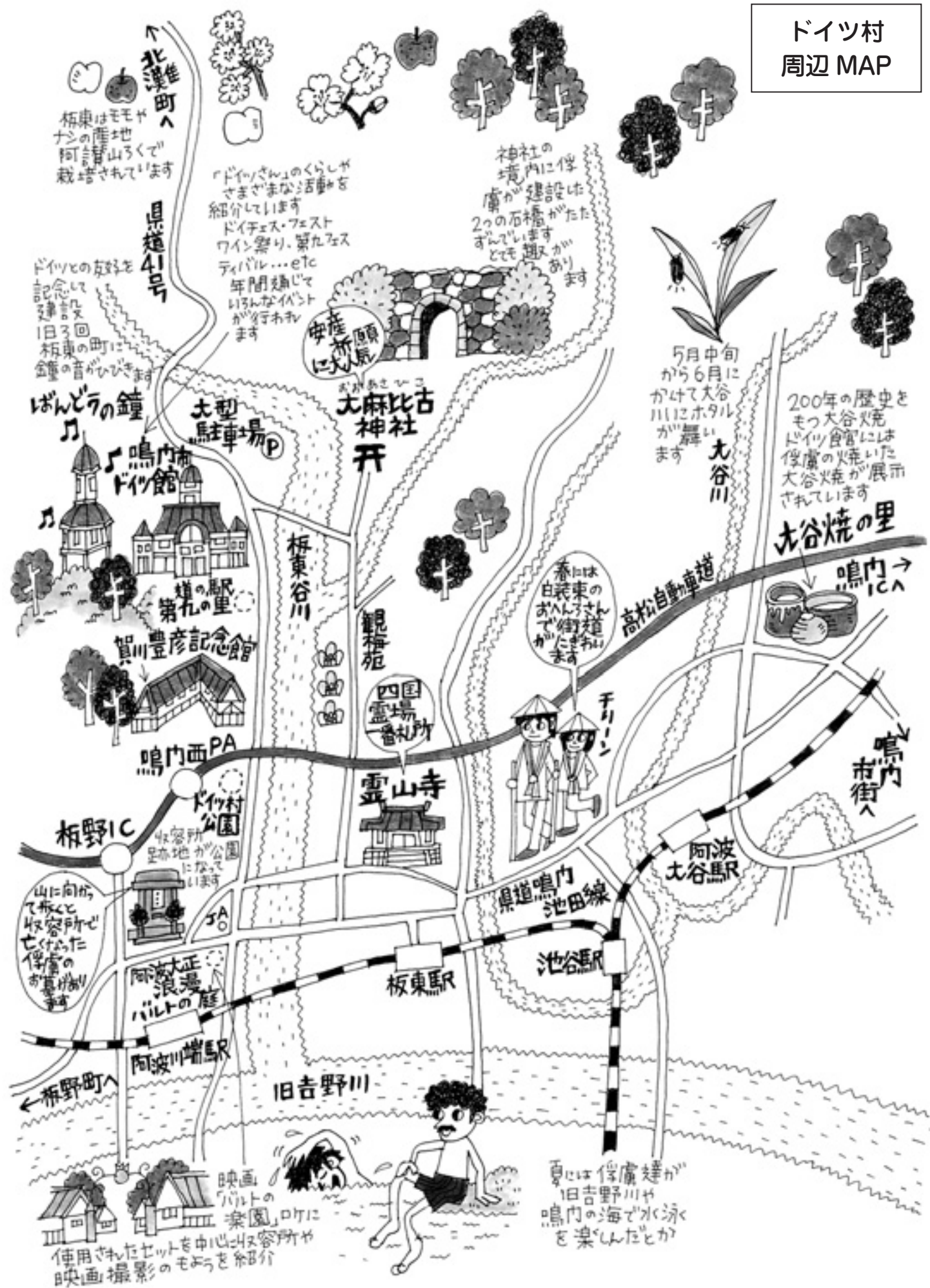


♪ おいしい第九グッズ



阿讃山麓の特産
品・阿波和三盆糖も「菓匠
孔雀」（鳴門市撫養町）の手に
がければ、こんなに洒落に。
上品な味と風味がたまり
ません。

ドイツ村 周辺 MAP



「第九」と私

浅野 司 郎



私が徳島大学学芸学部音楽科に入学したのは昭和27年です。1949（昭和24）年に国立大学徳島大学が設立され、誕生3年目でした。

設立当初ですので、いろいろ入試方法も変わり、昭和27年から学芸学部は教科制となり、私も何とか滑り込みで入学できました。当時、お世話になった近藤良三教授からは、たびたび出来の悪さを言われたものでした。音楽教室は木造二階建て1棟、ピアノも10台程度、食べるものにも不自由をした、とにかく無い無いづくしの貧乏な学生時代でしたが音楽教室仲間とは、本当に自由に楽しく、有意義な大学生活であったと、懐かしく思い出されます。1956（昭和31）年卒業、今年で57年が過ぎました。

私が今、生活している鳴門市は、ご存知のとおりベートーヴェンの第九交響曲「日本初演の地」であります。

1914（大正3）年、第一次世界大戦で中国：青島市に居留していたドイツと日本が交戦、約5000人の捕虜が日本に連行され、全国で12箇所の収容所に分けられ、生活をするようになりました。後、収容所は6箇所にまとめられ、その一つが鳴門市板東の収容所でした。約1000人のドイツ兵捕虜が1917（大正6）年から1920（大正9）年の約2年8ヶ月まで捕虜生活を送りました。

収容所の所長は、会津出身の松江豊寿氏で「捕虜も国のために戦ったのだから」との強い思いから、世界の収容所の中でも例を見ないほど捕虜の人格を尊重し、人道的な対応をしました。捕虜と地元民との交流も、大変盛んでした。また、音楽好きなドイツ人は、収容所内でも、盛んに音楽活動を展開し、1918（大正7）年6月1日、ベートーヴェンの交響曲「第九番」全曲が演奏されました。

日本人による「第九」演奏は、1924（大正13）年11月29日、東京上野の音楽学校生による演奏会が最初ですから、板東から6年後のことです。



30回目の演奏会は過去最大規模となりました。2011年6月5日

鳴門市では、1981（昭和56）「第九日本初演の地」の歴史の再現として、市民総ぐるみの第九演奏会を計画し、翌1982（昭和57）年、鳴門市文化会館落成・鳴門市制施行35周年記念として開催いたしました。

私と第九の関わりは、1991（平成4）年、山本直純氏の指揮による第10回記念第九演奏会からで、合唱団の一員として参加させていただきました。楽屋裏でのお手伝いから舞台への転進ですが『阿波踊り』ではありませんが「見る阿呆より踊る阿呆」を本当に実感しました。もちろん、難曲中の難曲ですから立派に歌える訳はありませんがオーケストラ100人、合唱団が600人という集団が力を合わせて一つの音楽を作り上げた時の感動は、まさに「Freude」であり、「alle Menschen werden Brüder」でありました。

今、全国から500人に近い方が北は北海道から南は九州：鹿児島まで、遠路鳴門にベートーヴェンの「第九」を歌うために来られています。年齢構成は、80代が3%、70代30%、60代44%と、高齢者が圧倒的に多いのです。ほとんど、第2次世界大戦を経験した、あるいは戦後の厳しい生活環境の中で少年時代を過ごしてきた皆さんです。「平和」への強い思いが『全ての人が兄弟となる』を歌わせているのだと思います。

3月11日に発生した東日本大震災、世界各地で発生しているテロ事件など、世界中が不安感でいっぱいです。平和で安心な、お互いが愛情をもって接し、助け合って生きていけるような世の中であってほしいとの願望が第九を一生懸命歌わせているのだと思います。「第九初演の地」で歌う私たちが少しでも、全国の「第九」を愛する思い、人間愛の思いに添えるよう、微力ですがボランティアを続けていこうと思っています。

私は、1999（平成11）年、鳴門の第九を当初から支えてきた仲間とともに「鳴門第九友の会」を結成、第九演奏会へのボランティア活動を開始しました。2003（平成15）年、第九友の会を発展解消し、NPO法人鳴門「第九」を歌う会となり、現在200名の会員をはじめ、全日本「第九を歌う会」連合会（平成元年に設立、鳴門市長が歴代の会長）及び鳴門市の支援を得て、第九演奏会の進展に取り組んでいます。

本年第30回を迎え、徳島交響楽団81名、全国から参加の合唱団630名、総勢711名で盛大に演奏会を行いました。

2018（平成30）年の「第九」日本初演100周年に向かって更に工夫を重ね、全国の方々の熱い

想いにお応えできるよう努力を続けて参りたいと考えています。

皆様のご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。

（昭和31年中学校課程 音楽教室卒）

～あなたも第九を歌いませんか～

NPO法人鳴門「第九」を歌う会事務局

TEL：088-686-9999 FAX：088-686-9994

<http://www.tv-naruto.ne.jp/daiku/>



「今年もやって来ましたよ」「ようこそ」……
全国の仲間との交流も大きな楽しみ

生命の誕生と進化に関する研究の最近の動向

Vol. 1

東京工業大学理工学大学院地球惑星科学専攻科教授 丸 山 茂 徳



生命の起源と進化は、自然科学の中の最大かつ究極の研究テーマである。その理由は、我々人間が最も知りたいことは『人類の未来』だからである。未来を予測するには、生命や地球の過去と現在を理解し、その中に法則性を見つけることが必要である。私は、地質学から研究を開始したが、現在この問題に取り組み、その全貌が見えてきたと思っている。以下に、その全貌を概説する。

1) 生命合成実験

生命の起源に関する論争の直接的な口火となったのは有名なミラーの実験である。この実験は還元大気（水、アンモニア、水素、一酸化炭素の混合気体）をフラスコの内部に入れて、火花放電（雷）によって有機物を合成し、更に生命を合成することを試みたものであった。以後、簡単な有機物から、アミノ酸20種類の合成、ペプチッドと呼称される簡単なたんぱく質の合成、グアニン他のDNA構成単位である塩基対の合成まで、着実にミラーの実験以降の50年間の室内実験で成功してきた。球状の液滴も実験で作られ、これが最初の細胞膜へと進化したのではないかと想像された。

問題はそこから原始生命の合成までの段階である。いくら実験に改良を重ねても、そこから先には進まなかった。後述するように、生命の合成までに巨大な壁が更に3つもある。

2) 深海熱水系の微生物

1970年代半ばになると、水深2500m深度の中央海嶺に熱水が噴出し、そこに生物群集がコロニーを形成し、化学合成細菌と呼ばれる原始的微生物が存在することが判明した。太陽光が届かない暗黒





の世界に生物が存在したことが大発見であったが、やがてこれらの微生物の一部が100℃を超える超高温下で生息し、しかも高温で生息する微生物ほどゲノム的には原始的であることが判明した。これらの深海熱水系微生物群集は玄武岩海洋地殻に伴うもので、カニやエビなど5億年前以降に出現した後生動物を伴うので、比較的若い時代に誕生したものである。

しかし、一部には、マントル橄欖岩が海底に露出して加水される蛇紋岩熱水系では水素ガスを放出し、pHは10を超える超アルカリ質で、その化学合成細菌はメタン菌などの原始的な古細菌に属する微生物群集がみられる。地質学者は、誕生直後の原始地球を覆っていたのは橄欖岩組成をもつ火山岩（コマチアイト）であったことを地球の記録から知っているため、インド洋や大西洋の中央海嶺に稀に観測される蛇紋岩熱水系こそ、地球最古の生態系で、そこでは現在も生命が誕生しつつあると考えるようになった。超アルカリ質熱水は高分子有機化合物を分解しないで安定化させる重要な触媒なのである。水素はメタンからアルデヒドに至る有機化合物を合成する重要なガスである。

こうして、科学者は熱水から噴出する流体の中に一連の生命構成単位である高分子

有機物を発見できるのではないかと期待するようになった。ところが、現在に至るも、一向にそれらしき高分子化合物や原始生命を噴出する熱水の中から同定することができなかった。

これらの微生物群集を含む中央海嶺熱水系は、誕生後2億年以内に、海溝に到達し、そこからマントル深部に沈み込み消失する。従って、海底には40億年以上前に遡る生態系など存在する筈はなく、原始生態系を残す生物群集が、何らかのプロセスで、海底に生き延びているものの、40億年の間に大きく進化したに違いないからで、現在の中央海嶺の環境で生命の誕生が現在も行われている保証はない。

3) 深部宇宙観測の進歩

電波望遠鏡など、それまでの可視光望遠鏡とは異なり、より波長の長い電磁波（音波）を利用した深部宇宙の観測が実用化されると、宇宙の果ての星雲からメタンやアルデヒドなどの有機分子の存在が報告されるようになり、星間雲で生命の基礎構成単位である複雑な有機物や生命そのもののまでの合成が可能ではないかという考えが生まれた。生命体は宇宙で生まれ、地球に飛来して進化したと考える（パンスペルミア説）人たちが出現した。

しかし、後述するように、生命を合成する条件を考えると、宇宙に生命誕生場としての、『もうひとつの地球』を考えざるを得なくなる。実際、原始太陽系星雲に相当する分子雲からはホルムアルデヒドなどの極めて単純な有機物しか検出されていない。（続く）。

（昭和47年中学校課程地学教室卒）



特集 ‘こころ’の防災にむけて
—東日本大震災支援活動から

大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 内 海 千 種



2011年3月11日、未曾有の大震災が発生しました。この大震災によりお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災地の皆様に心からお見舞い申し上げます。

一瞬のうちに多くの命や生活基盤を奪ったこの震災に対し、国内だけではなく世界各地から支援活動が行われています。支援の内容も、医療をはじめ衣食住に関わる物理的なものから、心理的支援に至るまで幅広いものとなっています。徳島県からも様々な支援が行われていますが、県教育委員会からも、地震発生一週間後から継続して教職員を宮城県内の学校避難所へ派遣しています。児童・生徒のこころのケアを目的に養護教諭等を派遣したこの支援活動は、学校再開支援のチームへと引き継がれていきました。ここでは、筆者が活動に参加した2011年3月25日から29日までの現地の状況と活動内容の報告と、災害時に起こりうる心身の変化とその対応をご紹介します。

■派遣目的とチーム編成

今回のような大規模災害の直後に被災地以外の場所から支援に向かう際には、組織化された支援活動が行える体制の中で、活動の目的を明確にしておくことが推奨されています。筆者が参加した徳島県教育委員会からのチームの派遣目的は、学校再開支援の一環としての子どもたちのこころのケアでした。日頃教育現場で活躍されている教員の派遣を開始したこのチームの構成は、養護教諭3名（うち1名は班長の指導主事）、特別支援学校教諭1名、臨床心理士1名（筆者；心理士の参加はこのチームのみ）でした。現地では、宮城県教育委員会の協力のもと、牡鹿郡女川町、石巻市、多賀城市の小・中・高等学校で活動を行いました。



【写真1】活動中宿泊していた会議室。宿泊室はまだ安全確認がされていなかった



【写真2】緊急車両と一般車両のゲートが分けられた高速道路

■派遣先の状況（2011年3月25－29日）

沿岸部以外の仙台市とその近郊の幹線道路は通行可能な状態となっていました。しかし津波で流されてきた車や建材などは道路脇につまれたままで、信号機が作動していない交差点もありました。また、スーパーやガソリンスタンドも営業を再開はじめていましたが、店前は長蛇の列で、購入制限や給油制限が設けられているところもありました。お世話になった仙台市内の宿泊施設では、地震の影響による壁の破損等がみうけられました。また電気や水道は使用可能でしたが、ボイラーの安全確認が済んでおらずライフラインの復旧途中でした【写真1】。

派遣先のうち津波の被害が甚大だった沿岸部避難所までの道のりは、大変困難なものでした。そこに至るまでの高速道路では警察による通行車両の確認があり【写真2】、一般道では地図上あるはずの道路は消えてなくなっており、車が1台通れるほどのスペースがかりうじて確保されている状態でした【写真3】。この全半壊した建物や生活用品等が山のようになり積み上がった中を進んでいくと、様々な物の入り交じった臭いが押し寄せてきました。さらに晴天時には、地面に溜まっていたヘドロが粉塵となって舞い上がるため、マスクをして歩く人の姿が目立ちました。このような環境の中にある避難所では、1教



【写真3】活動中活躍してくれた徳島県の公用車



【写真4】避難所となっている学校の廊下。教室内で生活するため、机などが廊下にだされている

室に3－5家族が生活をしていました【写真4】。また体育館では、段ボールだけで仕切られた空間に数百人が生活しており、館内の通路上での生活を余儀なくされている人もいました。さらに避難所と同じ敷地内にテントで作られた遺体安置所がある場所もあり、派遣時も二百をこえるご遺体が安置されているとのことでした。ライフラインについては、自家発電等により電気は使用可能な場所が多かった一方、水の供給が安定しておらず水洗トイレの使用が制限されていることもありました【写真5】。食事にも制限がみられ、一日二食の場所もありました。その内容も菓子パン、冷たいおにぎりなどが主でした。



【写真5】グラウンドに設けられた仮設トイレ



【写真6】インフルエンザ対応用にもうけられた休養室

た。このような住環境、食環境の中、インフルエンザやノロウイルスの感染も問題化していました【写真6】。

今回の震災では上記の様に、津波による被害の甚大な地域が大きく取り上げられることが多いように感じます。確かに、同じ避難所区域でも沿岸部の住民と内陸部の住民とで被災の状況は異なり、住民間にも温度差が存在するという話もありました。しかし、津波の被害がなかったといわれる内陸部の学校でも、生命の危機に瀕する体験をした生徒を支えている場合もあり、「津波の被害のなかった地域だから」とまとめられることを疑問視する声もありました。心理的支援の分野では、原因となる出来事のあ



常に持ち歩いていた、放射線測定器



【写真7】活動の様子

と周囲の人からの言動等でさらに傷つけられることを「二次被害」といい、支援においては「二次被害の防止」つまり、さらに負担をかけないこと「no harm」が基本とされています。この「二次被害」を防ぐためにも、心理的な支援を行う際には、支援先の“個別の”背景を知ることが基本であると再確認しました。当然のことではありますが、“被災した地域”、“被災した人”ではなく、それぞれの“具体的な”被災状況を知り被災前の環境を鑑みることが必要だと思います。

■子どもたちの状況と支援活動

所属児童の半数が死亡している学校や、所属児童の9割の自宅が全半壊している学校などがあり、ほぼ全ての子どもが何らかの喪失体験を抱えていました。子どもの中には、震災以降不安が高まり保護者から離れられなくなっている場合があります。こうした子どもの反応は、子どもだけでなく保護者も不安にさせます。地震や津波への遭遇といった体験や、それによる大切な人や物の喪失は、不安だけでなく様々な変化を起こしえることが知られています。心理的支援の役割の一つは、どのような反応が起こりうるのかを伝え、今起こっている反応についての対応をすすめていくことです。

保護者から離れることができずにいる子どもがいる一方で、遊びたくても、子ども同士で集まりたくても、集団生活の中で場所の確保が困難な状況にいる場合もありました。子どもたちの話し声や遊びは、「うるさい」「騒がしい」と叱られることもあり、

周囲に配慮する保護者からも注意をうける子どもの姿がみられました。そのためか、避難所内では長時間ポータブルゲーム機で遊ぶ子どもの姿が目立ちました。また子どもだけでなく、子どもと終始密着している保護者の疲弊も感じられました。子どもたちにとって遊びは、自身が体験した出来事を表現し、受け止めていく手段の一つです。そのため遊びの中では、地震ごっこや津波ごっこといった形で、

出来事の「再現」を行うこともあります。これも子どもたちが大変な事態に向き合っていくプロセスの一つです。子どもたちが“安全”な場所で、“安心”して遊びができる場所の確保、これも大切な支援の一つになります。

今回の主な活動【写真7】は、各避難所で子ども用の遊びスペースの確保をお願いし、その場所で子どもたちの集団遊びの見守りや個別の関わりを行うことでした。トランプや卓球などの集団活動では、遊具の種類も数も限られている中、子どもたち自身が工夫をすることで遊びがひろがることもあり、支援の目的の一つである“自己コントロール感をもって”活動をしているようにみえました。また、集団活動に入りづらそうにしている子どもには、時間や空間の共有をしながら絵を描くなどの個別対応を行いました。高台にある避難所から町を見下ろし「僕たち何も悪いことしていないのに・・・」とだけつぶやき、多くを語らない子どもの中には、青色で描いた殴り書きを津波にみたてて自分の自宅が逆さまになって流れる様子を表現する場合もありました。出来た作品を共有しながら、子どもたちが作品にこめた思いや願いに耳を傾けました。

■心理面に対する防災も ―今回の派遣から

今回の派遣先では、東北地方太平洋沖地震が発生する前から、震災後の心と体の変化や、災害時に援助者として対応するための基本事項を記載した資料が準備されていました。また訪問先の学校には、危機時における子どもたちの心理的支援について他機

関と連携して独自の資料を作成している教諭もいました。このような基盤のもと、県教育委員会どうしの連携もあり、現地での子どもたちとの関わりに専念することができました。もちろん想定外の事態が発生し、マニュアル通りにいかないことは多々ありますが、基盤の存在とその周知の大切さを再確認しました。

東海・東南海地震の影響が心配されるここ徳島県在住でなくとも、自宅の地震対策や緊急非常袋の準備をされている方は多いと思います。災害時には、避難とその後の生命維持が第一なのは言うまでもありません。しかし、その危機事態の中生活していくためには、環境と身体と心のバランスをとっていくことも必要です。阪神・淡路大震災以降、心理的支援の必要性が取り上げられていますが、災害時に自分自身にはどのような心身の変化が起こりうるのか、子どもに反応が起こってきたらどのくらい様子をみていたらいいいのかなどの知識を準備されている

方は少ないのではないのでしょうか。

災害などの大変なストレス状況に対し、知らず知らずの間に適切ではない対処をしてしまうこともあります。例えば、アルコールを飲んで気を紛らわすということも見受けられますが、大量のアルコール摂取によって依存状態や、時に生命の危機がもたらされることもあります。また、震災後に突然起こり始めた心身の反応にとまどってしまい、不安等の感情から抜け出せなくなることも起こってくるかもしれません。物理的な震災への対策に加え、心身にどのような変化が起こってくるのか、対処として何ができるのかを知っておくことも、防災のひとつとなるのではないのでしょうか。また、日頃からストレスへの対処方法を持っていれば、危機時にも役立てることができます。緊急非常袋の中身を確認する際には、普段ストレスを感じたときに感じる変化と、対処としてとっている行動なども是非振り返ってみてください。

子どもに起こりうる心身の変化

からだの反応

頭痛、腹痛、下痢、吐き気など
食欲がなくなる、食べ過ぎる
寝付きが悪くなる
怖い夢を見る、夜泣きをする
おねしょをする

※すぐに「こころの問題」とせず、まずは医療的な治療が必要ではないか確認を。

こころの反応

突然パニック状態になる
少しの刺激にもびくりする
一人になることや、見知らぬ場所、暗いところや狭いところを怖がる
イライラする
機嫌がわるい
急に素直になる
落ち込む、表情が乏しくなる
ぼーっとしている

生活や行動での変化

赤ちゃんがえり（退行）
わがまを言う
反抗的になったり、乱暴になる
集中力が落ちる
そわそわして落ち着きがなくなる
話をしなくなる、話しかけられることを嫌がる
無表情で感情をだすことが無い
出来事に関連した遊びを繰り返す

これら全ての反応は、震災という危機的事態において誰にでも起こりうる正常な反応です。
多くは、時間とともに回復します。
震災体験が意志に反して繰り返し思い出されたり、関係する状況などを極端に避けたり、神経が高ぶって眠れないなどの過度な興奮状態が続いている場合や、上記の反応が1ヶ月たっても緩和する気配がない場合は医療機関や専門機関にご相談ください。

子どもが安心感を取り戻し、周囲の人とのつながりを感じるために…

- ・できるだけ子どもと一緒にいてあげましょう
- ・生活リズムを整えてあげましょう
- ・子どもが話すことを聴いてあげましょう

無理に聴き出そうとはせず、気持ちが語られた時にはゆっくり聴いてあげてください。子どもが悪いわけではないこと、今は一緒にいて大丈夫であること、弱音をはいても恥ずかしくはないことなどを伝えてあげてください。

小学校時代の恩師の手のぬくもり



大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

総合科学部教授・学部長 石川 榮 作

前回から連載コラムを書かせていただいています
が、前回に引き続いて小学校時代に恩師から受けた
感動も現在の私にはなくてはならないものです。

私は高知県西端の田舎町で生まれ育ち、小学校時
代には勉強はほどほどにして、あとは野山を駆け回
り、夏は海と川でよく遊んだものです。当時ヒット
作となった映画『二十四の瞳』のように、担任の先
生と一緒に近くの山に登ったり、近くの川へ泳ぎに
行ったものです。春には遠足などもあって、楽しい
思い出ばかりです。

もう一つ忘れられない思い出は、陸上部でのこと
です。田舎の小学校のことですから、陸上部といっ
ても、秋の大会が近づいたら、急遽足の速い生徒を
集めて陸上部が結成されるというものです。陸上部
の先生はとても厳しくて、私たち生徒は恐れながら
練習に励みました。それでも大会が終わると、飴湯
やぜんざいなどで慰労会を開いてくださるのが、毎
年の楽しみでした。6年生のときのその慰労会の席
では、その厳しい先生が歌を歌ってくださいまし
た。「結んで開いて、手を打って、結んで、また開
いて、手を打って、その手を上に」というよく知ら
れた歌ですが、その中の「また開いて」の箇所で先

生は股（両足）を大きく開いて、踊ってくださった
のです。そのときの感動は今でも忘れられません。
日頃の練習では厳しい先生だったけれども、練習を
離れればこんなにもひょうきんで、やさしい先生な
んだなと思いました。現在の私がひょうきんなの
も、この先生の影響があるのかもしれない。

この陸上部の先生に比べると、6年生のときの担
任の先生は美術がご専門で、日頃からたいへんやさ
しい先生で、大好きでした。卒業式の日、最後に小
学校を去って行くとき、その先生と握手を交わした
ときの感動は今でも忘れられません。卒業後も毎
朝、私が自転車で中学校へ通う途中、スクーターに
乗った先生から「おはよう」と挨拶されて、大きな
励ましになったものでした。その先生の手のぬくも
りは今の私の手の中でも残っています。コンピュー
タやメールでコミュニケーションを図ることの多い
この頃ですが、まさに現代の教育にもこの恩師の手
のぬくもりのようなものが必要ではないでしょう
か。私にとって教育とは恩師のいつまでも温かい手
のぬくもりです。恩師との触れ合いの中から生まれ
た感動が私を育ててくれたような気がします。



スタートライン

S T A R T L I N E

私を強くさせるモノ ― 社会人になったの3か月を振り返って ―

岸田 菜月



皆様、こんにちは。平成23年3月総合科学部人間社会学科アジア研究コース卒業、現在、扶桑電通株式会社関西支店で勤務している岸田菜月と申します。ネットワーク販売部に所属し、電話機や電話交換機などの営業の仕事をしています。私の会社は全国54地点に拠点があり、入社してまず全国各拠点の新入社員が本社のある東京へ集合し、約2か月間の新入社員研修を受けました。東日本大震災による混乱が収まらない中、東京という不慣れな地で社会人のスタートを切ることには大きな不安がありましたが、その不安はすぐに解消されました。同期21人とすぐに打ち解け合い、研修を終えて大阪に帰って来るときには、大学を卒業するときの名残惜しい気持ちに似た思いが込み上げてくるほどで、よい仲間にも恵まれたことに感謝しています。今でも他支店、他営業所の同期とは頻繁に連絡を取り、お互いの近況や仕事ぶりを伝え合って、もっと頑張ろうという活力をもらっています。

新入社員研修を終えて1か月が経った今、徐々に会社の雰囲気にも慣れ始め、ようやくこの先自分がやるべき仕事を理解し始めたところですが、思わず恥ずかしくなってしまうようなミスや迷いの連続で、私のトレーナーとして指導してくださっている先輩をはじめ上司の方々に迷惑をおかけすることが多々あり、落ち込むこともあります。しかし、最近それらの失敗をプラスとして考えることができるようになってきました。今では、失敗や様々な体験を

積み重ねていくことが少しずつ成長に繋がっていくと確信しています。そのような考え方を持てるようになったのは、新入社員研修で学んだソリューションビジネスのプロセスを自身の成長過程に当てはめて考えられるようになったからです。ソリューションビジネスとは、単にお客様にモノを売るのではなく、お客様が抱えている問題を解決する方法を提案する営業活動のことですが、それを行うにはまずお客様の現状と今後お客様がどのようなことの実現を目指されているのかの2点をしっかりと把握し、そのギャップを埋めるお手伝いをする作業が営業マンのやるべき仕事だと研修で知りました。私は今、その考え方を応用し、自分の現状の姿と今後のあるべき姿、まずそれを理解、設定して、そのギャップを新人のうちに経験する失敗や様々な体験によって埋めていきたいと考えています。それらの一つひとつの経験が私を強くさせるモノであり、自分を磨いていくものだと思います。失敗を恐れず、自分がやるべきことに全力で取り組み、早くトレーナーの先輩に恩返しができるよう、会社に貢献できるよう成長したいです。

徳島大学へ伺わせていただく機会がありますときには、大学時代のときとは一味違う私でいられるよう精進して参ります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

(平成23年人間社会学科アジア研究コース卒)

「スタートライン」に立ち見えたもの

徳島大学大学院 総合科学教育部博士前期課程地域科学専攻 1年 的場 一将



2011年3月に徳島大学を卒業して、同年4月から徳島大学の大学院生としての新しいスタートを切った。この8月で大学院生活が5ヶ月目になる。今回は、この5ヶ月間の大学院生活を振り返って改めて感じたことを書いてみたいと思う。

大学までの通い慣れた道、通い慣れた大学の校舎、顔をよく存じ上げている大学の先生方。4月からの大学院生活は全くもって新しい環境とは言いがたいのだが、学部時代に勉強してきたことを下地として、より深く自分の専門分野を掘り下げて専門性を高めていこう、という新たな思いを胸に大学院での初めての授業に臨んでいた。しかし、徳島大学の大学院の授業は学部の授業とは時間帯が違い、夕方から始まるものが多いため、入学当初はなかなか生活リズムがつかめずにいた。そのような時には同期の大学院生たちと愚痴をこぼしたり、励まし合ったりして乗り越えたことを覚えている。

人との出会いは本当に素敵なものだ。学部時代にはあまり話をする機会がなかった同期とも今ではよく話をし、今まで知ることがなかった新たな一面を

見ることができた5ヶ月間でもあった。また同期の大学院生の中には海外からの留学生も多く、彼らと日々、日本と海外との習慣の違いやものの捉え方の違いの話に花を咲かせている。そんな彼らとも、この徳島大学に入学していなければ出会うことがなかったのだと考えると、つくづく徳島大学に入学してよかったと感じている。また、留学生たちが日本という異国の地で日々一生懸命に自身の専門分野の研究に勤しむ姿を目の当たりにしては、「自分も負けていられない。頑張らなくては」と奮い起こされる毎日を送っている。

研究に関しては、学部時代からお世話になっている素敵な先生のもとで、自分の専門分野の研究をのびのびとさせていただいている。この5ヶ月間、先生と一緒に修士論文に関係する論文を読んだり、論文の記述に関して議論をしたりと、とても充実した毎日を過ごさせてもらった。きっとこの先もこのように研究をしていこうと思うと今から楽しみでならない。もちろん研究がこのようにいつも順調に行くわけではない。研究に行き詰まり、全く身が入

らない時もある。そのような時は、同期の友人に相談することはもちろんのこと、学部時代の先輩にも電話やメールをしてアドバイスをもらっている。私自身の性格と私の研究をよく知ってくれている先輩からは、時に厳しく、時に温かい励ましをもらう。また、社会人となって忙しい毎日を送っているにもかかわらず、大学に立ち寄った際には必ず連絡してくれる先輩もいて、いつまでも私を気にかけてくれる人が周りにいることに幸せを感じている。

この稚拙な文章を読んでもくださっているあなたの周りにも、きっと、素敵な先生方やご友人、先輩・後輩がいらっしゃると思う。その方々とのつながり

を大切に、新しい出会いに胸躍らせながら、あなたが決めた、あなただけのスタートラインに立ってもらいたいと思う。新しい目標に向かって何かを始めるのは、もちろん不安と緊張でいっぱいだ。でも、周りの方々に見守られながら立つスタートラインは、不安や緊張を抱えながらも、どこか安心できる出発点になるのではないだろうか。これは、私自身が決めた「大学院生」という新たなスタートラインに立ったことで改めて感じることもできたことである。

(平成23年人間社会学科欧米言語コース卒)

社会人になって

半田明日美

あっという間の4年間を修了し、右も左もわからぬまま社会人になってから半年近く経ちました。大学では臨床コミュニティ心理学を専攻していた私が飛び込んだのは、全く未知の世界とも言える金融業界です。

私は地方銀行で事務の仕事をしています。銀行の事務は書類の種類が多く、一見同じものでも様々なパターンの処理方法があるため、覚えるだけでもとても時間がかかります。毎日のように失敗してしまい、その度に自分で作った仕事のマニュアルは分厚くなっていきます。悔し涙を流す日もあります。だからこそ、以前できなかった仕事ができるようになったり、お客様に「ありがとう、助かった」と言ってもらえるととても嬉しいです。今はまだ直接お客さまとお話させていただく機会は多くありませんが、私の目の前の書類は全て地域の方々のものだと考えると、正確に、丁寧に処理しなければならないと気持ちが引き締まります。

徳島県は急激な高齢化が進んでいます。銀行員が一人暮らしの高齢者の認知症に気づき、結果的にトラブルを防ぐことができたといった、地域のお客さまに身近な存在であるからこそできるサポートがあります。コミュニティ心理学では疾病が広まる前の予防を非常に重視していると学びましたが、地域に密着した銀行の行員として、私なりにお客さまの生活が安心したものになるようお手伝いできるように

なりたいと思っています。

私の大学生活は授業とアルバイトと部活というごく普通のものでしたが、卒業した今になって良かったと思うことが2つあります。1つめは、幅広い分野について興味を持って勉強してみたことです。試験の前には自分の選んだ授業の幅が広すぎて勉強に苦労したこともあります。就職活動で様々な企業の方とお話させていただいたときの話題にも困ることがありませんでした。そして2つめは、友人や先輩、後輩、そして先生方との出会いです。高校から大学に進学して一番変わったと思うのは、本当に色々な人と出会う機会があるということです。就職すると、営業職でない限り人間関係の幅は狭くなりがちです。もちろん自分の考え方と合わない人もいるかもしれませんが、同じ事柄についてもこんなに見方が違うんだ！と新鮮な気持ちになれます。この気づきは、自分で考えていても得ることはできません。ありきたりかもしれませんが、大学ではたくさんのことを学び、たくさんの人と出会って、どんどん自分の幅を広げていってほしいです。そして、総合科学部がこれからもずっと学生にとって様々な出会いと気づきの場であることを願っています。私も早くお客さまを笑顔にできるような行員になれるように、地道に努力していきたいと思っています。

(平成23年人間社会学科人間行動コース卒)

現在の私と心残り

黒谷 功

私は現在、高知県にある西日本科学技術研究所という総合コンサルタント会社に所属しています。コンサルタント会社とは、国や県などが行う事業を受注し、設計や調査、分析等を行う会社です。その中で私は水環境研究室に配属されており、河川の補修事業やダム建設などの工事が河川環境へ与える影響をモニタリングする仕事を行っています。そのため主に現場へと出掛け、現地での観測や測定、採水を行い、サンプルを会社へと持ち帰り分析を行う業務に携わっています。所謂座学の様な研修は無く、現地での行動や注意点を、上司の動きを見て覚える日々です。しかし自然環境が相手の仕事であるため、河川の状態が同じ日は無く、その日その時の状況に合わせた行動と注意が必要であり、覚える事は山積みだと感じています。

この業界へは、在学中に研究室で行っていた研究に近い職種であり、環境調査という分野に興味を持

ったため就職を希望しました。そのため学生時代に、研究室で得た知識や技術、研究で現地へと行き採水などを行った経験など、仕事へと活かせる部分が多くあります。しかし大学での研究とは異なり、仕事ではより効率的な作業（丁寧である事と同等に速度）が要求される事や、業界や会社としてのルールが有る事、扱っている水の違い（研究では上流域の水が、仕事では主に下流域の水が対象）等から、自分の知識や常識などに囚われない様心掛けています。

在学中の皆さんは、どんな夢や希望を持って徳島大学へ入学されたのでしょうか。将来やりたい事、就きたい職業を既に考えているのでしょうか。前記の通り、私がこの業界への就職を希望したのは研究室へ配属されてからです。それまではと言うと、化学系の研究室へ進む事は入学当初から決めていたものの（これも固い決意ではありませんでした）、物理系・

地学系・生物系など受講可能な講義はひたすら受けていました。それは私が何かしらの研究職に就きたい、と漠然とした夢を抱いていたためであり、本当に自分が興味を抱ける分野は何なのかを探そうと思ったからです。早くから夢を持ち切磋琢磨する事は素晴らしい事だとは思いますが、だからと言って何事も初めから必要不必要を決め付け、取捨選択をしてしまうのは非常にもったいないとも思います。

様々な事に手を出してみて、様々な経験を積む事が出来るのも大学生ならではの、今更ながら大いに感じており若干後悔もしています。ぜひ様々な経験を学生のうちに積み、人生の糧としていって下さい。

〔平成23年大学院総合科学教育部博士前期課程
地域科学専攻修了〕

虚心坦懐

野中 俊介



臨床心理士という、いわゆる「心の専門家」になるための専門的知識を身につけたための勉強や、実習等に励んでいた徳島大学大学院を終了してから、早4ヶ月が過ぎました。「まだ4ヶ月」と言った方が、私が感じている日々が過ぎる速さを良く表しているかもしれません。生まれ育った千葉を離れ、仲間とともに研究に実習に励んだ徳島での2年間は、かけがえのない2年間であり、今でも素晴らしい思い出となっています。大学院の修士課程を終了し、社会人としての生活を迎えるに当たっては、これまで学んだことに囚われず、職場での1つ1つのことを吸収していこうと心がけています。

今の職場では、主にひきこもり状態にある人や親に対する援助を行っております。仕事内容としては、事務仕事もありますが、ひきこもり状態の人の親に対してはカウンセリングや講座を行っております。また、ひきこもり状態の人に対しては、コミュニケーションが苦手な人も多いため、まずは集団の中に入ることから始まります。集団の中では、少しずつ周りの人とコミュニケーションを始めたり、料理を作ったり、フットサルをしたり、旅行に行ったりと様々なことを通して集団の中に溶け込んでいきます。そのような中では、ひきこもり状態の人が集

団にスムーズに溶け込んでいけるような援助をするのも仕事内容の1つです。大学院の実習の中などで学んだ、話の聴き方やクライアントとの信頼関係の築き方がこのようなときにも役立ちます。また、ひきこもり状態の人は、様々な精神障害や発達障害等と関連している場合も多いため、ひきこもり状態の人がどういう状態なのかを見立てる上でも、大学院で学んだことが役に立ちます。

その一方で、ベテランのカウンセラーのカウンセリングや、ひきこもり状態の人の居場所のスタッフの集団への気配り方など、これまであまり体験することのなかった実践面で多くのことを学ぶことができます。また、一見「それでいいんだろうか」と疑問に感じる先輩の対応方法でも、よく見ていると的を射たものであったりします。したがって、一見疑問に感じることであっても、立ち止まって考え、自分の中で整理する必要があるように感じています。これからも、これまで学んだことを生かしつつも、先入観や偏見を持たず、1つ1つのことを吸収していこうと思います。

平成23年大学院総合科学教育部博士前期課程
臨床心理学専攻修了



助任の丘に蜂須賀桜を植樹

佐藤 義忠

歴史と伝統ある総合科学部の表通りに新しく「助任の丘」がつけられました。その園庭に由緒ある蜂須賀桜が選ばれ植樹されました。

江戸時代総合科学部の敷地は、蜂須賀藩の下屋敷の一つとして開けられました。戦後新制大学として発足した当時白壁の土蔵が建っていました。この度園庭を作るにあたり、蜂須賀氏と関係ある蜂須賀桜を植えてくださる光栄に浴することになりました。

江戸時代といえば山桜が中心で、淡い緋色をした早咲きの蜂須賀桜は貴重なものであったでしょう。江戸時代の徳島城御殿を描いた全図の中で、その中心となる就毬場の植樹春夏秋冬の樹の一つとして、春の樹として蜂須賀桜が描かれています。城壁には山桜が植えられていました。その移植された原本が武家屋敷原田家に守られていました。

江戸時代徳島城御殿にあったおとめ桜（蜂須賀桜）を明治維新から昭和にかけて、原田屋敷が大切に守ってきました。平成になって蜂須賀桜を守るため純粋培養を考えた入田の森田初美氏が独自の技術で全くの同一種を開発されました。それを徳島の名桜として県下広く植樹していこうと「蜂須賀桜と武家屋敷の会」を結成し活発な活動を展開しています。



武家屋敷原田家に咲き誇る蜂須賀桜。毎年3月上旬に一般公開される



2010年5月25日、北島理事により
植樹が行われた

蜂須賀桜は、学術的には沖縄の「寒緋桜」と「山桜」の一代交配雑種の桜です。淡いピンク色の花びらをもち早咲きの気品のある桜です。

もともと桜の原生地はネパールです。何億年前、アフリカの南端にあったインド大陸は北上しユーラシア大陸と衝突しネパールやエベレスト山脈が誕生したといわれます。それまで針葉樹におおわれていた地球に広葉樹が生まれ桜が生まれたといわれます。その桜がヒマラヤ山脈を越え2億年かかって日本へきたといわれます。亜熱帯で常緑樹の沖縄へきた桜は、1～2月の好期に受粉を成功させるため小鳥を呼びよせる必要から緋色の花びらを咲かせます。

それが日本列島へくると冬寒く山膚は茶褐色におおわれているので冬季は冬眠をおぼえ、春一番が吹くと目覚め目白や鶯を呼ぶため薄ピンクの花びらを咲かせます。子孫を残すため受粉が完了した桜はす早く花びらを散らせます。これが日本の山桜です。

この山桜と沖縄の寒緋桜との一代交配雑種が蜂須賀桜です。山桜と伊豆半島で生まれた花びらの真白の大島桜の交配したのがソメイヨシノです。

南の国で生まれた蜂須賀桜がどうして阿波の国へ来たのかという疑問に対し、蜂須賀桜の名付け親の染郷正孝博士は、多分江戸時代に鹿児島島の島津家から蜂須賀氏に贈られたものであろうと推測され、茨城から鹿児島へ自家用車を走らせ実地見聞されました。今も薩摩の武家屋敷には蜂須賀桜が植えられているということです。

早咲きの淡いピンク色の蜂須賀桜は、地球の植物の貴重な歴史を宿している名花なのです。樹勢に優れた蜂須賀桜は総合科学部発展のシンボルとなることを祈っています。

(昭和33年中学校課程史学教室卒)

Let's sports

体や健康、スポーツに関する話題を
シリーズでお届けします

Vol.2

阿波踊りで楽しく健康づくり — 阿波踊り体操 —

徳島大学 大学開放実践センター 教授 田 中 俊 夫



1. 阿波踊り体操とは

「阿波踊り体操」をご存じでしょうか。阿波踊りは400年もの歴史を持つ徳島の郷土文化ですが阿波踊り体操は平成18年に「県民健康づくりサポートツール」として制作した健康体操なのです。

徳島県は糖尿病の死亡率が平成5年から14年連続で全国ワースト1を記録していて大きな県民課題となっていました。また、1日の歩数が全国平均よりも約1000歩少なく、肥満者の割合も男女ともに全国でも上位なのです。これらの問題解決には食生活の改善と運動不足の解消が不可欠であることはいうまでもありません。そこで、運動の実践に県民にとって親しみのある阿波踊りを活用しようという試みがこの阿波踊り体操なのです。

2. 阿波踊りは体にいい！

阿波踊りの基本は2拍子のリズムに乗って手足同じ側を前に出す、いわゆるなんばの動きですが、さ

らに男踊りと女踊りの2種類の踊り方に分類されます。この2種類の踊り方が、踊りとしての躍動感や美しさだけでなく、エクササイズ(運動)としても、体力づくりに大変有効な動きで構成されているのです。

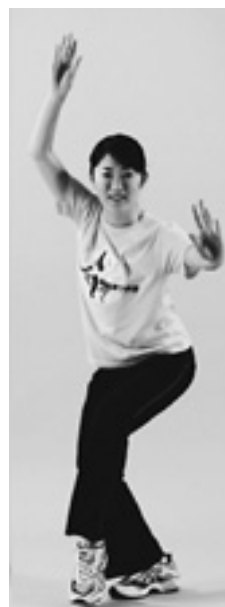
男踊りは重心を下げた中腰の姿勢が特徴で、スクワットというトレーニング姿勢に類似していて、太ももの前側やお尻の筋肉を鍛える動作といえます。

一方、女踊りは背筋を伸ばして膝を引き上げる動作に加えて両手を高く上にあげる動きが特徴的で、足を引き上げる大腰筋や肩周りの筋肉を使う動作です。

これらの動きを健康づくりの観点からみれば、足腰を鍛え、粘り強い下半身を作ることや、肩こりの予防や改善に効果的であると考えられます。



女踊り



男踊り

さらに阿波踊りは全身を持続的に動かす有酸素運動でもあります。したがって阿波踊りを踊ることで楽しみながらウォーキングや筋力トレーニングの効果が得られるということになるのです。

しかし、阿波踊りを継続的に行っている人はごく一部の人であり、踊れるという人でさえ、県民の半数に満たないというのが現状です。そこで体操を行う中で阿波踊りの練習もできて、踊れない人でも楽しく運動できることを狙って作ったものが阿波踊り体操なのです。音楽は四国大学の増田篤志先生が阿波踊りのリズムや旋律を生かしたすてきなオリジナル曲を作曲してくださいました。

3. 阿波踊り体操の内容

平成18年に制作した阿波踊り体操は3分半で、基本編とシニア編があります。体操では、ストレッチ動作によって肩や腰をほぐし、筋力づくりの動作で下肢の大筋群を刺激します。実際の阿波踊りは1つの動作の反復ですが、体操としては様々な動きを組み合わせ、健康づくりに役立つ体操としてバランスのとれたものとなっています。もちろん踊りの場面では全身を動かし、血液循環を促進します。

シニア編は基本編をベースに、踊り部分を含めて数か所で動きがゆったりとしたものになっていて、体力に自信がない人や車いすの方でも実施できます。ただし、80歳以上の方でも基本編を行っているという人も多く、シニア編とは言え、年齢による区別があるわけではありません。

4. ギネス級？あなたもやってみませんか！

発表以来5年が経過した阿波踊り体操ですが、各種メディアに何度となく取り上げていただいたことにより県内外での認知度は上がってきました。ご当地体操がブームですが、ご当地以外への普及はトップクラスでしょう。これは全国的に阿波踊りそのものが高い人気であることに大きく後押しされています。

そして全国一といえるのは基本編の後に制作された別バージョンの数です。平成21年に制作した2枚目のDVDには3つの目的別バージョンが収録されています。エネルギー消費を高める「メタボ解消編」、筋力強化やバランス力強化に有効な「トレーニング編」、脳卒中患者や後期高齢者のリハビリに活用する「リハビリ編」です。

さらに平成23年には3枚目のDVDを発表しました。多くの人の悩み解消に役立つ「肩こり腰痛解消編」、短時間で一汗かける「プチエネルギー消費編」、ペアで楽しむ「フレンズ編」がその内容です。その



他、「高齢者ドライバー編」や「マタニティー編」も完成するなど「阿波踊りを楽しみながら健康に！」は加速するばかり。10バージョンもあるご当地体操は間違いなく阿波踊り体操だけ…ギネスブックに申請する??

ホームページ「That's 阿波踊り体操」ではすべてのバージョンの動画を見ることができます。DVD 3種類（各300円）は徳島大学南常三島生協などで取り扱っている他、郵送も可能です。詳しくはホームページをご覧ください。また、大学開放実践センターでは夏に県との連携により無料公開講座としてリーダー養成講座を開催していて、県外からの参加者も毎年いらっしゃいます。

あなたも是非ご体験ください！

阿波踊り体操のDVDについて

- ・徳島県内の保健所や市町村などの公共施設に配布しています。
（保健所では貸し出しを行っています。その他の公共施設についてはご確認ください）
- ・県外からのお問い合わせは徳島大学 大学開放実践センター 阿波踊り体操事務局まで

インターネットで見よう

DVDの映像は、インターネットを使って以下のサイトでご覧いただけます。

徳島県庁ホームページ>検索>阿波踊り体操
阿波踊り体操事務局 HP 「That's 阿波踊り体操」
<http://awaex.cue.tokushima-u.ac.jp>

DVDをお分けします

体操のDVDを300円でお分けします。郵送の場合は郵送費が必要です。

問い合わせは阿波踊り体操事務局まで

TEL & FAX(088)656-6174

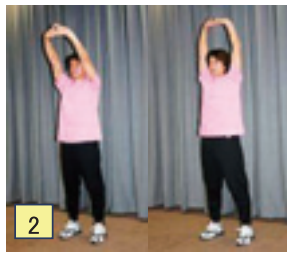
基本編

■ ストレッチ ◆ 筋力づくり ● 全身運動



<オープニング>

軽く阿波踊り＋
ポーズ（右左）・高く（右左）



<ストレッチ>

両手を組んで斜め上に伸ばす
＋ 両手を上に伸ばす（肩）



両手を頭の後ろで組んで肘を後ろに引く
＋
肘を後ろに引きながら顔も上げる



両手を前に伸ばして背中を丸く
＋
肘を後ろに引きながら背中を反らせる
（2回くり返す）（背中・胸）



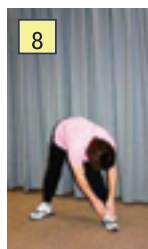
手を斜め上に伸ばす（右左）
（体側）



腰を落として上体を回し、高く立ち上がる（右左）
＋（下肢筋力）
2度目は手のひらを上に



上体をねじって、手を高く上げる
（右左×2回）
（脇腹・腰）



上体を斜め下に深く倒す
（右左×2回）
（腰・太もも裏）

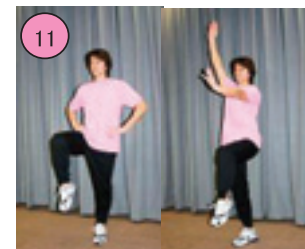


屈伸運動（2回）
＋（下肢筋力）
上体を右左に開き、腰を落とす。
右に開く時は右手を前に伸ばす



<やっこ踊り>

つま先立ち＋
肘を肩の高さに上げて後ろに引く
（ふくらはぎ・背中）



<女踊り・もも上げ>

もも上げ＋
手をつけてもも上げ



<女踊り・ポーズ>

もも上げ（3つ目にポーズ）＋
手をつけてもも上げ（3つ目にポーズ）



<男踊り>

1. かかとを前に出す 2. 足と一緒に手をグーで前に 3. 足と一緒に手をパー、グーで前に 4. 足はつま先タッチに、手を上に、腰も落とす
（太もも・ヒップ）



<阿波踊り>
自由に



両手を上に伸ばして、膝をゆるめて上下に揺らす
＋肩の力も抜いて揺らす



深呼吸（2回）



<ポーズ>
自由にポーズを決める

シニア編

□ ストレッチ ◆ 筋力づくり ● 全身運動

※いすの人は浅く腰掛けて行いましょう



＜オープニング＞
軽く阿波踊り +
ポーズ（右左）
・高く（右左）



＜ストレッチ＞
両手を組んで斜め上に伸ばす
+
両手を上に伸ばす（肩）



両手を頭の後ろで組んで肘を後ろに引く
+
肘を後ろに引きながら顔も上げる
（肩・胸）



両手を前に伸ばして背中を丸く
+
肘を後ろに引きながら背中を反らせる
（背中・胸）



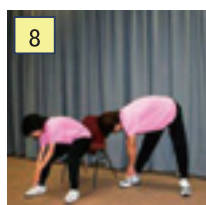
手を斜め上に伸ばす
（右左）
（体側）



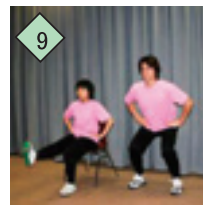
腰を落として上体を回し、高く立ち上がる
（右左） +
2度目は手のひらを上に（下肢筋力）



肘を上下に動かしながら上体を大きくね
じって、手を高く上げる（右左）
（脇腹・腰）



上体を斜め下に深く
倒す（右左）
（腰・太もも裏）



屈伸（4回）
（いすの人は太ももに力を入
れて足を交互に伸ばす）
（下肢筋力）



＜やっこ踊り＞
つま先立ち
+
肘を肩の高さに上げて後
ろに引く
（ふくらはぎ・背中）



＜女踊り・もも上げ＞
もも上げ
+
手をつけてもも上げ
（大腰筋）



＜女踊り・ポーズ＞
もも上げ（3つ目にポーズ）
+
手をつけてもも上げ（3つ目にポーズ）
（バランス感覚）



＜男踊り＞

1. かかとを前
に出す

2. 足と一緒に
手をグーで前に

3. 足と一緒に
手をパー、グー
で前に

4. 足はつま先タッチに。手
を上に、腰も落とす
（太もも・ヒップ）



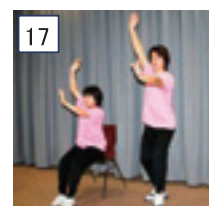
＜阿波踊り＞
自由に
気持ちよく踊る



両手を上に伸ばして、膝をゆるめて上下に揺らす
+
肩の力も抜いて揺らす



深呼吸（2回）



＜ポーズ＞
自由にポーズを
決める

最近ふと思い出したこと

野 田 陽 子



高校時代、放課後になると、麦わら帽子に首には手ぬぐい、足には長靴、手には軍手という姿で土いじりをしている先生がいた。別に園芸部があったとかでもなかったので、園芸の好きな先生なんだなあという印象であった。何故印象に残っているかというと、園芸をしている時の先生の表情が実に穏やかで、本来の数学の授業中の先生の顔よりも生き生きしているように見え、そのギャップに驚いた記憶があるからである。工作中（学校にいる時間）にする園芸がそんなに楽しいのかな、と。…それから十数年後、昼休み時間にいそいそと職場の外に出てプランターをいじっている私がいようとは…。

私にとって園芸は身近な存在ではあったけれど好きというレベルではなかった。職場でも特に植物を育てるような仕事があったわけでもなかった。ある日なんとなく花が終わってそのままになっているプランターにちょっと出来心で勝手にハーブの種をま

いてみたりしたことがきっかけだった。特に手入れを必要とするような植物でもなかったのだが、昼休み時間にちょっと時間をみつけては外に出てちょこちょこいじって和んでいた。プランターの前にいるとその時間だけは無の境地になっているというか、気分をリセットするような感じになっていたように思う。息抜きというか、息継ぎというか。プランターをさわりはじめる前は、昼食を外で食べるということが息継ぎになっていた。この息継ぎをすることによってエネルギーを充電し、午後からの仕事も頑張ろうと気持ちを切り替えていたのだと思う。ただ、植物の世話のほうはどうも下手で、水をやりすぎて失敗することが高確率で発生しており、園芸の腕は上達したようにはとても思えなかった。それでも、植物とふれあう、世話をするという時間は当時の私にとっては癒しであり、必要不可欠なものになっていたのだと思う。

今は職場もかわってしばらくたち、私のなかでの園芸の位置づけも、職場での癒しから自宅での管理（水やり、草抜き等）が間に合わなくて大変というふうに変化してきているが、年々身近なものにはなっているなど感じる。当時の先生の場合は校内での園芸担当という役割もあったのかもしれないが、あの先生も校内での園芸で癒されながら日常業務を頑張っておられたのではないかと勝手に思っている。

〔平成3年総合科学科社会科学コース・ピークⅡ（行動科学研究）卒〕

徳島大学を卒業して19年

金沢大学理工研究域数物科学系・教授 長 山 雅 晴



徳島大学総合科学部を卒業してもう20年になろうとしています。在学時は数理情報コースに所属し、主に数学とコンピュータプログラミングの勉強をしていました。数理情報コース担当の伊藤正幸先生や

村上公一先生に当時大変お世話になったことを今も覚えています。4年時は熱方程式に対する初期値境界値問題とその数値計算法について学び、研究室での勉強が大変楽しく感じたこともあり大学院に進学

し勉強を続ける決心をしました。しかし、当時の総合科学部には大学院がなく、指導教員の勧めで広島大学大学院理学研究科数学専攻に進学しました。その後、東京大学、龍谷大学、京都大学を経て、現在金沢大学理工研究域数物科学系教授として研究・教育に従事しています。私の専門分野は応用数学であり、反応拡散系の数値計算や非線形現象に対する数理モデルの研究を行っています。反応拡散系の数値計算は熱方程式の数値計算法がベースとなっており、振り返ってみると4年生のときに勉強したことが現在の研究の基礎になっていることがわかります。

京都大学数理解析研究所に助手として就職してからは、物理学や化学の研究者と共同研究を行うようになりました。その頃から自然界の不思議な現象に対して数理モデルを作り、その現象について数学を使って理解する研究を主に行っています。また、昨年度に科学技術振興機構「戦略的創造研究推進事業」CRESTに採択され、研究代表者として数理皮膚科学の確立を目指した研究も行っています。このCREST研究は、資生堂の皮膚科学研究グループが中心となっている生理学実験チームと数学、物理学、化学、生物学を専門とする研究者からなる理論・基礎実験チームの2チームから編成されています。この研究目的は、理論と実験の両面から、皮膚の重

要な機能であるバリア機能（保水機能と細菌等の侵入を防ぐ機能）に対してその恒常的維持の機構やその低下に起因して生じる皮膚疾患の発症機構を解明することです。

19年前に面白いと思った勉強を続けていたら幸運にも研究者になれ、研究費にも恵まれ自分の好きな研究を続けることができました。そして、これからも続けていけるように努力したいと思っています。徳島大学を卒業してから得られた教訓は、「自分の夢や目的に向かって努力することができれば、少々の運も必要ですが、何らかの形で夢や目的は達成できる」ということです。私の場合、徳島大学を卒業した時点で大学の教授になるなんて夢にも思っていなかったのに、夢が叶ったとはいえませんが、自分の好きな研究を続けていくことができています。目的を達成していない方は諦めず目的に向かって努力してください！きっと運が巡ってきます。何を努力すればいいのかわからない方は信頼できるアドバイザーに相談してください。何かよいヒントを与えてくれます。アドバイザーがいない方は周りをよく見てください。必ず近くにいます。最後になりましたが、研究・教育の面で徳島大学に貢献できる機会があればなあ…と思いつつ筆を置きたいと思います。

〔平成4年総合科学科基礎科学コース・ピークI(数理・システム科学研究)卒〕

エッセイ

大学院修了後9年間の私

大阪大学大学院歯学研究科博士課程4年 佐藤文彦

平成14年に徳島大学大学院人間・自然環境研究科自然環境専攻修士課程を修了し9年が経ちます。現在、私は大阪大学大学院歯学研究科博士課程4年次に在籍しています。

私は大阪薬科大学卒業後、修士課程に進学し「ハオコゼ毒棘成分の精製とその生理作用」というテーマで中川秀幸教授の御指導のもと研究を行い、棘毒から有用な成分 Karatoxin を分離精製することができました。地元徳島では伯父の遊漁船で沖釣りという趣味もできた充実した研究生活でした。

修士課程修了後、大阪大学歯学部に入部し新たな道を歩むことになりました。同級生とも話が合い、ソフトボール部に入部し他大学や社会人チームと試合や交流を深めることができました。一方、勉学や

部活動の傍ら歯学部3年生での基礎配属実習（口腔解剖学第二教室）の内容「顔面皮膚及び舌粘膜おける疼痛関連行動と c-Fos 発現」という課題で大阪大学課外研究奨励費を獲得できました。1年3カ月間の課外研究の結果を発表また論文にすることもできました。

歯学部卒業後、地元の徳島大学病院で研修医として勤務し、私は他大学出身でしたが総合診療部の先生方には懇切丁寧に御指導していただくことができました。研修医同期の徳島大学歯学部出身者は、実は私が修士2年生のティーチングアシスタント（TA）として情報科学演習の授業補助をした当時の歯学部生であったことが分かり、徳大には不思議な縁があるものだなと実感しました。もしかし



たらこの会報を読んでいらっしゃる方やご家族ご親戚の方を診察したかもしれません。

徳大病院勤務後、大阪大学大学院歯学研究科博士課程に進学し、「三叉神経感覚核への直接投射を持つ大脳島皮質の同定とその部位の感覚受容について」のテーマで研究を行っています。現在、これまでの成果を学会発表も行い、まとめているところです。本年12月には公聴会で発表し、1月には論文提

出の予定です。私の研究室には鍼灸師、柔道整復師、歯科衛生士、英語日本語同時通訳の職を持ったさまざまな先輩・後輩との共同研究もあり、歯科だけに拘らない広い視野で物事を考えていく姿勢を実感しています。

以上修了後9年間の私のことを述べましたが、少し特殊な9年間であろうかと思います。しかし、やはり修士課程の恩師中川秀幸教授による研究に取り組む基本的な姿勢が常に基になっているのだと考えています。また総合科学部は文系と理系の学科の特徴を生かした幅広い教育による考えを学ぶことができ、今後の世の中において創造的な貢献をしていくのに必要だと思います。私には身近な母校として、徳島大学は特別な存在で現在も帰郷の際には研究室を訪問し、近況などを報告しています。今後も学んだことをさらに発展させ世の中での健康増進に役に立てるような研究を行っていきたいと考えています。

〔平成14年大学院人間・自然環境研究科
自然環境専攻修士課程修了〕

エッセイ

草創期の恩師を偲んで

山 田 秀 雄

昭和24年6月8日から3日間に亘って、私たちは徳島大学第一回の入学試験を受けた。当時教員は給料が低いと言われて不人気の職業であった。それ故に教員養成学部は入試問題が幾分平易であるらしいことと、授業料が不要であることを知ったが、それでも四中の競争率が約2.5倍であることで安閑としてはいられなかった。尤も授業料が不要だったのは最初の年だけで、翌年からは徴収された。入試より早く同年1月には前以て進学適性検査なるものを工専の校舎で受けていた。それは一種の作業検査であったが、60点満点のうち平均は約20点だったそうで、その点数が内申書に記入されて僕たちは少し怯えていた。

数学問題では三角形の合同条件の応用とか数列の総和とか収束を問うものとかがあって、現在の入試から見れば単純に見えるかもしれない。勿論幾何や微積分なども後ろの方にあった様だった。入試3日目には前川講堂で身体検査があったが、いわゆるM検もあり羞恥を覚えた。

前川講堂には古い木製の4人掛け長椅子がぎっし

りと積み重ねられてあるのみで、学部だけの行事や体育の授業などではその椅子を並べ変えて利用していた。

入学式は7月15日に工学部の講堂で厳粛に行われた。

夏休みは遅れを取り戻すために多忙で、教育原理や法制などの集中講義に明け暮れた。「オリエンテーションのため集合」などと言われてもその意味も分からず、モチベーション、ガイダンスなどの新語にも僕らは戸惑うばかりだった。

徳島工専から来られた蒲池正紀先生は、八女潤の筆名で徳島歌人社を主宰され、村崎凡人、大谷幹男、今川幹夫の各氏、師範の出身者を糾合されて徳島文化協会を設立し、新聞社や放送局も巻き込んで活躍された。

蒲池先生の英語の訳述は華麗そのもので、例えばスチーブンスンの「一夜の宿」では、白皚々たる、霏々として、白雪粉々など、古典的なことばを的確に繰り出してはパリの雪景色を彷彿とさせて下さっ

た。

先生の発音は英國南部の毅然としたものであったが、フィン先生講義は日本語はなく英語オンリー。そしてそのオーストラリア風の特徴ある言い方は我々には特異なものと映った。だからと言うわけでもないが、ESSの仲間たちは徳島本町の教会へ行って神父様のゼミに参加させてもらったが、そのニューヨークの微妙な鼻母音と語尾のr音には感動した。

心理学の小田信夫先生は大阪府立一中の数学教師として出発された方だが、心理研究が哲学的思索から次第に数理・測定・統計を援用する傾向へと移り、先生は心理学教室を率いてそれをリードする学者となられたわけである。時あたかも教育心理学協会から「日本教育心理学会」へといわば衣替えをする時代でもあった。「グループダイナミックスの理論と方法」「Nature and Nurture」などは小冊子ながら本教室による学会への貢献であった。

岸田元美先生は温厚篤実なお人柄で私たちに接して下さったが、丁度4年生の頃、教師の心理とその在り方についての因子分析的な論文を発表されたが、それは同時にこの上ない我々へのプレゼントにもなった。それはすでに学界での権威ある文献として各所に引用されている。

松浦祐紘先生は土浦航空隊司令部所属の颯爽たる青年士官であられたが奇跡的に無事帰郷され、私共に発達心理学と教育統計とを御指導下さったわけである。相關関係を求める課題を頂いて苦労したことが懐かしい。

田中勝蔵先生の日本史の授業では、記紀歌謡を始め、琉球語、朝鮮語の共通した語源的解明について精緻を極めたが、それはもう訓詁の学と言うべきものであった。

沖野舜二先生には江戸時代の浪人問題などを教えて頂いた。先生は休日には郡部の旧家や史跡を訪ねられては研究を重ね、その成果は「概説阿波史」となり、福井好行先生の「徳島県の歴史」と共に当時の国史学研究室の優れた業績として忘れてはならないものと思う。

私共は時に、友人に代返を頼んだりする愚行をやらかしたが、沖野、栗津両先生は何もおっしゃらず各人の顔を眼鏡越しに確認しつつ出欠を取られ、以て反省を促されていたようであった。

倫理学で福井尚吾先生はほほえみながら「君たちも垣を乗り越えたりせず、正門から守衛のおじさんに挨拶をして堂々と帰り給え。馬でさえ敢えて柵を飛び越えたりはしないものだ」と諭された。要するに心の中に自らの規範を持つてということで、栗津先生がカントの定言命令として言われることと同じだと思った。

その栗津先生には四年の折、教育社会学を教えて頂き、最終講義では課題として地域の実態を地図にまとめて提出するようにと命じられた。単位認定の条件である。勿論住宅地図などは存在しない時代なので、各軒を訪問しての実態調査は大変だった。まさにフィールドワークである。先生は「地域社会の理解から教育は始まるのだ」と言われた。

そして先生は更に加えて、波多野精一「西洋哲学史要」、篠原助市「理論的教育学」を自らの基本として学んでおくようにと言われた。

本年4月末、恒例の同窓会を持ったが、この一年間に4名の旧友が亡き数に入れたことを知った。とにかく悲観的になりがちな一同を力づけてくれるものは、やはり恩師や旧友の思い出であることをしみじみと認識して来年の再会を誓ったことであった。

(昭和28年中学校課程音楽教室卒)

エッセイ

46卒 同窓会

髙 原 彰

昭和46年3月に卒業ということで「46卒同窓会」と命名した。平成23年3月5日、卒業以来40年、初めて開いた同窓会。徳島東急インに25名の参加者を得て、昔話や苦労話で大いに盛り上がり、3年後「第2回46卒同窓会」での再会を誓い合って名残を惜しんだ。

以下は、開催に至る経緯や当日の様子などを紹介して、涓水会々報の粗稿としたい。

〈開催に至る経緯〉

卒業して既に40年、その間、一度も同窓会開催計画の話題すら出なかった。数年前より、学生時代の

友から『そろそろ定年退職を迎える年だから、定年退職を機に一度逢いたいなあ』という話は出ていた。パチンコ・麻雀・お酒の話で一晩中話題が尽きることのないような連中である。思い起こすだけでも自然に口元が緩み、あの頃が懐かしく思い出された。是非、悪友たちとの集いを計画し、久々の麻雀大会パチンコ大会…、楽しい企画を巡らせていた。

そして、昨年夏、案内状の発送先整理に取りかかって愕然となった。音信不通の40年だから、所在地不明が大半であり、どうしようもない八方塞がり状態となった。そんなとき、渭水会事務局の存在を思い出して尋ねてみることにした。

懐かしい教育学部の建物は、現在は「総合科学部」と改称されてはいるものの、40年前の名残は留めていた。何十年ぶりの訪問になるのか。久々に学舎に入った。渭水会事務局で尋ねた用件を話すと、快く「昭和46年3月、徳島大学教育学部小学校教員養成課程卒業生名簿」をいただくことができた。

久々に見る同窓の仲間たち。懐かしい名前が並んでいる。しばし、40年前の感慨に浸っていた時、「そうだ、同じ集まるのであれば、みんなに声をかけて同窓会にしよう。」その時の、その決心が、今回の「46卒同窓会」開催に至る発端となったのである。

〈果たして参加者はいるのか〉

今回の同窓会企画は、事前に準備会を開き発起人が相談をして、綿密な計画を立て具体化するという手順は全くない。南常三島のキャンパスで、40年ぶりに見る友の名前に熱い思いがこみ上げ衝動に駆られた思いつきに端を発している。

案内状の文案作りも発送も独断であり、集まる人数も読めない中で発送作業は完了した。

数日後、『宛先に尋ねあたりません』無情にスタ

ンプの押された封筒が返便されてきた。覚悟はしていたものの、40年の月日は厳しい現実を突きつけてきた。さらに、追い打ちをかけるような返事ばかり（「不参加」に○印）が届けられる郵便受けであった。

40年間、音沙汰なしで過ごしてきて、今頃になって初めての同窓会を開くというのは無理だったのか。（途方に暮れる日々が数日続いて…）

すっかり意気消沈していた頃『参加』に○印がつけられ、添え書きに『〇〇さんの住所は、現在…です。』と書かれた嬉しい返事が届くようになった。（どうやら、私の知らないところで連絡を取り合い参加を呼びかけていたようである。）

10人、15人、20人…。そして25人の参加を得て「46卒同窓会」は開催の日を迎えることができたのである。

〈労を惜まず、知恵を絞って〉

1つは、「小冊子」の編集である。参加者全員に、40年のつれづれを綴った玉稿を依頼し、同窓会の参加記念としての小冊子を製本配布した。

2つ目は、「記念写真」への配慮。小冊子の頁に「記念写真座席表」を準備し、後日送付の記念写真（下記添付写真）で、参加者の氏名確認ができるようにした。（40年の歳月は変貌著しく）

3つ目は、確認できた仲間全員へ開催報告書と住所録の送付である。盛会に開催できたこと。そして「第2回46卒同窓会」の開催予定は3年後徳島で…。など詳細な報告書の送付。

次回「46卒同窓会」の盛会を心から祈念して。

（同窓会幹事 髙原）

（昭和46年小学校課程保健体育教室卒）



高校・特別支援学校部会総会並びに講演会

部会長 加 藤 賢 治

本年度の高校・特別支援学校部会総会は、平成23年8月20日（土）に、ホテルグランドパレス徳島にて、渭水会から佐藤勉会長、濱田治良理事長、近藤隆子副会長、総合科学部から石川榮作学部長様、顧問の皆様のご出席をいただき、高校・特別支援学校の会員の皆様のご参加のもと開催されました。

平成22年度会務報告、決算報告の後、平成23年度役員選出、平成23年度会務計画、予算案についての審議がありました。会務報告、決算報告、会務計画、予算につきましては、事務局提案の案のとおり承認されましたので、御報告させていただきます。

平成23年度役員につきましては、現職の校長先生方を副会長に、副校長・教頭先生方を監事に、退職された校長先生方を顧問にお願いすることにさせていただきました。また、恒例により、今回の総会において、次期会長に海部高等学校の富田校長先生を選出させていただきました。各先生方、どうぞよろしくお願いいたします。

本年度の講演会では、徳島大学名誉教授で、徳島大学総合科学部長、副学長、学生部長を務められた熊谷正憲先生を講師に、「他者理解について」と題して、先生の御専門の哲学や倫理学の立場でお話をいただきました。

熊谷先生のお話は、「他者は理解できるか」という問題提起から、道元の「正法眼蔵」、親鸞の「歎異抄」に始まり、脳科学、神経心理学、認知心理学の知見からの考えを含め、カント哲学、ヘーゲル哲学やサルトル、フッサールやオースチンという現代哲学者の研究分野にまで及びました。

私にとっては難しいお話でしたが、先生がまとめられた「人間の尊厳性は、単に自律性の発揮だけでなく、各人の個性・違いを認めることに存するのではないか？」や「生身の世界に生きる以上、「相克」の中で自己同一への絶えざる精進の中で自らの「知・価値の体系」を深く豊かにすることが求められているのではないか？」との言葉に、他者を認め、自らを律してよりよい生き方を求めて努力することの大切さを教えていただいたように思います。また、先生の真摯な情熱あふれるお話から、出席者一同、徳島大学の哲学教室や倫理学教室にいるような緊張感をもつ

て御講演を拝聴いたしました。熊谷先生は、講演会後の懇親会にも御出席いただき、会員とも親しく御歓談いただきました。

総会・講演会・懇親会

日 時 平成23年8月20日（土）
場 所 ホテルグランドパレス徳島
講演会 講師：熊谷正憲氏
徳島大学名誉教授（元総合科学部長）
「他者理解について」

平成23年度役員

顧 問	春藤 孝雄	平尾 隆信	森 勝
	吉田 善夫	住友 一郎	新開 英毅
	毛利 久康		
	（以上 総会等御出席）他70名 計77名		
会 長	加藤 賢治		
副会長	乾 初枝	富田 充宏	富樫 敏彦
	吉田 千壽	美馬 恒子	高砂 敏文
	田村 公子	井上 薫	吉野 勝裕
	飯田ひとみ	林 博子	松山 隆博
監 事	露口 幾也	下浦 忠雄	近藤 春江
	東條 浩士	山村 晃	村岡 直美
	山村 啓治	竹内 圭三	森住 俊子
	宮崎 衣	上野 清文	中内 貴文
	名山 優		
事務局	板野支援学校	088-672-3456	
	中内 貴文	畠内加代子	原口 良澄
	久樹 磨美	小谷 慎一	渡邊 珠子
次期会長	富田 充宏	（海部高等学校長）	

昭和49年養護学校課程卒
板野支援学校



徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報並びに本学ホームページを御覧ください。また、会員の皆様の御意見や御要望をお寄せください。

徳島大学総務部総務課 (Tel: 088-656-7021 Fax: 088-656-7012)

(E-mail: bunsyoc@jim.tokushima-u.ac.jp URL: http://www.tokushima-u.ac.jp)

I 学内の状況

1 AWA サポートセンターを開設

平成22年度文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」に、徳島大学 AWA (OUR) サポートシステムが採択されたことを機に、男女共同参画室機能強化のため、平成22年10月、AWA サポートセンターを開設しました。

10月21日には、オープンを記念して、本仲純子センター長から、他機関の支援活動の紹介があり、センターのスタッフらが、香川学長及び五十嵐副学長を囲んで意見交換を行いました。会は和やかに進行し、香川学長からは、女性が働きやすい環境を整えることは男性のためにもなることで、支援モデル事業が終わった後も継続して取り組んでいくための基盤を築いてほしいと激励されました。

AWA サポートセンターの名称は、平成21年12月に開催した「徳島大学キャリアデザインフォーラム—AWA(OUR)STYLE 自分らしい働き方—」からとっており、AWA を阿波、OUR と掛けて、徳島大学の構成員すべてがそれぞれ活躍できる働き方を支援するという思いが込められています。

2 第7回徳島大学国際展開推進シンポジウム「母国で振り返る私の徳島大学留学生時代」を開催

徳島大学では、平成23年3月3日、第7回徳島大学国際展開推進シンポジウムを開催しました。

徳島大学国際展開推進シンポジウムは、かつて徳島大学に留学し、帰国後母国等で活躍している元留学生を招へいし、母国等での活動状況や留学時の体験について講演いただくものです。

第7回目にあたる今回は、徳島大学出身留学生のうち、それぞれ現在①哈爾濱工業大学深圳研究生院電子・情報工程学科長の張 欽宇氏②マレーシアマラッカ技術大学製造工学部長の Mohd Rizal Bin Salleh 氏③米国 Microsoft Corporation, Software Engineer の楊 淳珂氏④韓国日立—LG Data Storage, Senior Specialist の孫 悠洛氏の4名が里帰りし、講演を行いました。

シンポジウムでは元留学生4人が、それぞれの留学時代を振り返って、当時の楽しかった留学生活や地域の人たちとの心温まる交流と感謝の気持ち、そ

して、それぞれの専門分野に導いてくれた恩師の教育・研究指導が現在どのように生かされているかなどを、スライドにより留学時代に学んで身につけ、今でも流暢な日本語で紹介しました。

講演後開催されたパネルディスカッションでは、講演した元留学生にとって何が大切かなど活発な意見交換が行われ、元留学生は自らの体験を後輩達に語りかけていました。

3 株式会社ニコンインステックとの連携・協力に関する包括協定を締結

平成23年5月30日、徳島大学は株式会社ニコンインステックとの連携・協力に関する包括協定を締結し、調印式を行いました。

徳島大学は平成23年1月に最先端の装置を導入した全国有数のイメージング施設であるバイオイメージングステーションを開設しました。そこには、実験動物用の PET、MRI、CT、in vivo イメージング装置や最先端の顕微鏡群が設置されています。これらの顕微鏡の導入については、これまでの技術開発の伝統と優れた実績をもとに次々と最先端顕微鏡を発表している株式会社ニコンインステックのご協力を得てきました。この度、連携・協力関係をさらに強化し、相互の教育・研究の一層の進展を目指して包括協定を締結することになりました。

II 学生関係

1 卒業式・修了式

平成23年3月23日、「平成22年度卒業式・修了式」が挙行され、合計1,846名（学部卒業生1,253名、大学院修士（博士前期）課程497名、大学院博士（博士後期）課程76名、助産学専攻科20名）の卒業生及び修了生に、香川学長から卒業証書・学位記が授与されました。

2 入学式

平成23年4月6日、「平成23年度入学式」が挙行され、香川学長が合計2,025名（学部1年次1,318名、学部3年次54名、大学院修士（博士前期）課程515名、大学院博士（博士後期）課程118名、助産学専攻科20名）の入学を許可しました。

総科ニュース

※この総科ニュースについての詳細は、徳島大学総合科学部総務係にお尋ねください。

徳島大学総合科学部総務係 TEL：088-656-7103 FAX：088-656-7298
E-mail：sksoumks@jim.tokushima-u.ac.jp

■総合科学部 1 号館のリニューアル

総合科学部 1 号館は 2 年間に及ぶ耐震改修を終え、たいへん快適になりました。今回の改修の特徴は、教育設備の整った教室・ゼミ室をはじめ、学生の共有スペースをできるだけ多く設けて、学生の積極的な自習を支援するとともに、自動販売機などを備えたラウンジも設けて、学生に憩いの場を提供していることです。また北棟 1 階には学部図書室を設置し、そこには自習スペースがあるのはもちろんのこと、集密書架も設備されて、かなりたくさんの書物を収納することができるようになりました。アカデミックな空間としてさらに充実させていきます。



■総合科学部「カルチャーラウンジ」の設置

総合科学部の教育研究環境の整備・充実の一環として、本年 7 月には 1 号館北棟 2 階に「カルチャーラウンジ」も設置しました。これは学生・留学生・教員がそこに集まって、語学の学習のみならず、さまざまなテーマについて議論しながら、互いにコミュニケーションを図ることのできる交流の場として設置したものです。あくまでも学生が中心となって企画・運営して、それに教員が支援するというかたちをとっています。魅力的なものとなることを期待しています。



編集後記

渭水会会報第40号をお届けします。ご寄稿された皆様には厚く御礼申し上げます。今号の表紙は「あすたむらんどアートプロジェクト 水環境と彫刻」の作品で飾らせて頂き、その制作者である鎌田邦宏様にその概略をTopicsとして解説して頂きました。今年度は学部長改選の年であり、石川榮作教授が二期目の学部長として選出され、そのご挨拶を頂きました。母校・総合科学部では1号館北棟の耐震改修が終り、校舎は見違える程立派になりました。渭水会事務室も新たに北棟に移転しました。恒例の「総合科学部では今(22)」では前就職委員会委員長の平井松午教授に、社会人としての基礎力を有し、社会的自立・職業的自立が可能な人材育成に大学がどの様に取り組んでいるかを解説して頂きました。また新連載「うたのふるさとを訪ねて」が始まり、浅野司郎様にご寄稿頂きました。2002年日本地質学会賞と2006年紫綬褒章を受章された東京工業大学教授・丸山茂徳先生には連載で「生命の誕生と進化」に関する原稿を寄稿して頂きました。興味深い

テーマですので、次号もご期待ください。3月11日には東日本大震災が起こり甚大な被害を受けました。本号では、この東日本大震災を特集として組み、臨床心理士として現地入りした渭水会々員の内海千種先生に体験談を寄稿して頂きました。被害を受けた方々には心から哀悼の意を表し、お見舞い申し上げますとともに、来るべき東南海地震に備える必要性を痛感いたしました。2年ほど前に出来た「助任の丘」に植樹された蜂須賀桜について佐藤義忠様に解説して頂きました。Let's sports Vol.2では徳島大学・大学開放実践センター教授の田中俊夫先生に阿波踊り体操について説明して頂きました。さらにエッセイとして総合科学部創立期に卒業された方々からもご寄稿頂きました。また、山田秀雄様から「草創期の恩師を偲んで」を寄稿頂き、当時を知る人には懐かしい思い出が蘇ったと思います。嵩原彰様からは卒業以来40年後の同窓会を企画し、盛大に開催できた様子を解説して頂きました。広報係では会員の皆様からの色々な内容のご寄稿をお待ちしています。